衆議院東京 10 区補欠選挙の取り組みについて「TeN ネットワーク 2016」の総括

2016 年 12 月 10 日

2016 年 10 月 23 日投票でおこなわれた衆議院東京 10 区補欠選挙で、私たち市民は「市民と野党の統一候補」の実現をめざして「TeN ネットワーク 2016」（略称 TeN16）を結成し、市民と野党の協議によって野党統一候補となった鈴木ようすけ氏（民進党公認）を支持し、当選をめざして全力で活動しました。結果、自民党公認候補に敗北したことは大変残念ですが、市民運動として大きな教訓を得ました。

政党と市民をつなぐブリッジ型の「政策協定」を結び、「市民と野党の共同候補」ができた

7 月の参院選挙では、安倍政権の暴走をとめようと、32 ある一人区すべてで野党統一候補が実現し、そのうち 11 選挙区で勝利をするという画期的な政治状況が生まれました。10 区補欠選挙でも野党統一候補を実現しようと、その大前提となる「政策協定」をつくるため、候補者を擁立していた民進党、共産党とくりかえし話し合いをもちました。「政策協定」のない共闘はありえないと考えたからです。民進党の代表選挙をはさむという大変な時期でしたが、野党の合意事項をもとに私たち市民の願いをくわえ、10 項目の「政策協定」をまとめあげました。この「政策協定」を、TeN16 が、民進党、共産党候補それぞれと結び、ブリッジ型の「野党統一候補」を実現、TeN16 は鈴木ようすけ氏を「市民と野党の共同候補」と位置づけました。このことは東京の国政選挙において初めてであり、画期的なことでした。関係者の尽力に感謝しています。

しかし、統一候補の実現と政策協定の締結が告示直前だったことから、市民独自の運動が限られ、また、候補者の宣伝物はほぼ作成済みであったため、選挙戦のなかで「政策協定」が反映されることはほとんどありませんでした。

野党による候補者一本化はできたが、選挙協力は実現しなかった

10 月 5 日、四野党幹事長・書記局長会談にて鈴木候補に一本化が決まりました。この時、民進党選対から野党間の選挙協力体制をとるという確約がとれないまま、TeN16 としての態度を決めることは大変悩ましい事態でしたが、「市民と野党の共闘」の大義のために苦渋の決断として鈴木候補の支持を決めました。その後、民進党にたいして、他党や団体への協力要請をするようもとめ続けましたが、結局民進党選対は、ほかの野党に推薦も支持ももとめないどころか、他党からの推薦の打診も拒否し、政党の中央段階でなされた「できる限りの選挙協力をする」という約束は事実上反故にされました。

それが象徴的にあらわれたのが、最終盤の池袋西口野党党首クラスの合同街頭演説会です。各党の弁士の話は大変素晴らしいものでしたが、野党共闘の図のなかに鈴木候補を置かないという民進党選対の判断によって、候補者自身が出席しないという稀にみる奇妙な光景がつくられてしまいました。参加者はもとより、SNS で中継されていたこともあり全国から抗議と非難が噴出しました。このことについては民進党にたいして抗議文を送りましたが、選挙後に、選対本部事務局長より、口頭で「民進党内部のガバナンスに問題があった」と謝罪がなされました。野田幹事長のその後の野党共闘に前向きな発言は、さまざまな力が働いての結果と思われますが、私たち市民の行動もまた一定の影響を与えているように思えます。

市民と野党の協力関係ができ、また、東京で新しい市民連絡組織の結成につながった

一方で、立候補を取り下げた共産党、政治団体として唯一推薦関係を結んだ生活者ネットワークをはじめ、野党会派のみなさんはそれぞれに選挙勝利をめざして活動し、超党派の協力関係、そして市民との協力関係を深めることができました。さらに、補欠選挙ということもあり、10 区以外の市民も旺盛に選挙活動に参加してくれました。こうしたなか、選挙前には、現職相手候補の知名度、小池都知事の人気、マスコミの異常な報道などにより、ダブルスコア、トリプルスコアでの敗北といわれていたものを、４対６にまでもっていくことができたことは貴重な成果でした。しかし投票率が 34%という史上最低であったことも、この選挙自体が有権者にとって魅力あるものとなっていなかったことの証左であり、大きな課題を残しました。

選挙後、補選で生まれた市民の横の結びつきを生かして、新たに「市民と野党をつなぐ会＠東京」が発足しました。市民の連携が広がったことは、野党統一候補の実現、市民と野党の共闘を進める力になることと確信します。次期衆議院選挙において、真に市民と野党の共同が力強く広がることを願ってやみません。　以上